

## 取手アートプロジェクト実行委員会（茨城県取手市）

### 1. 概要説明

取手アートプロジェクト（以下、TAP）は1999年から取手市行政機関（市役所、教育委員会、取手市文化事業団）、市民（アート取手・郷土作家の会）、東京芸術大学などが実行委員会を組織して、三者が共同で行っているアートプロジェクトであり、若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、広く市民に芸術に触れる機会を提供することで、取手が文化都市として発展していくことを目指している。

上記の三者のうち、行政機関である取手市の文化芸術課からは担当員として1名がTAPに関わっている。助成金申請の手続きや市内公共施設などを借りるための手続き、また日々の運営の現場においてもご尽力頂いている。市民スタッフは取手市内外からのボランティアスタッフで構成されており、中高年から若手まで年齢層は幅広い。主にプロジェクトの実働メンバーとして日々活動している。また東京芸術大学からは美術学部、音楽学部それぞれから教員が1名ずつ、数名の学生が授業の一環として関わっている。教員は学生やスタッフを指導し、学生は市民スタッフと共にプロジェクト運営について学んでいる。

主な活動には「公募展」と、「オープンスタジオ」の二つがあり、これらを毎年交互に開催している。

「公募展」とは、全国的な公募による野外アート展を指し、「オープンスタジオ」とは、地元取手在住のアーティストのアトリエを一般公開する企画である。前者は取手市外から新しい文化的刺激を呼び込むと共に、若手アーティストの創作を支援するものであり、後者は取手市に内在する潜在的文化力を活性化させることを狙いとしている。

### 2. プロジェクト発足の経緯

こうしたTAPの開催は、取手市に東京芸術大学先端芸術表現科が新設されたことに由来する。1990年当時、取手市は東口駅前区画整備事業が完成年度を迎え、主要道路の拡幅整備などによ

り、景観に大きな変化が見られた。その都市計画の中で、彫刻などの展示を目的とした「ストリートアートステージ」が、



ストリートアートステージ

歩道に沿って12基設置され、東京芸術大学先端芸術表現科は、取手市から、うち4基に展示する作品の依頼を受ける。それに対し、同科の渡辺好明教授は、この依頼を前向きに捉えながらも、単に作品を街中に設置するだけでは、作品が景観に埋没してしまう可能性を指摘し、アートの訴求力が十分に発揮されないことを危惧した。そこで、改めて渡辺教授から逆提案にされた企画がアートと地域とを結び付けたアートプロジェクトの開催であった。

アートプロジェクトとは、展示された作品を市民が鑑賞するだけに留まらず、アーティストとともに作品や展覧会を作り上げるプロセスを共有することで、アートに対する深い関心と理解を促すことをその特徴としているものである。

こうした動きに対して取手市は、まちの文化的な発展を期待するだけでなく、「競輪のまち」(ギャンブルの街)として知られていた取手のイメージを「芸術のまち」に変えていこうとする思いと重なったことから、TAPの開催に合意することとなった。

### 3. 市民主導で行われるアートプロジェクト

市民が積極的な活動を行うTAPは、取手市に大きな影響を与えている。特に「オープンスタジオ」の開催により、それまでは交流の少なかった地元在住のアーティスト達が、お互いを認知す

るようになった。また「公募展」に参加した若手アーティストも、TAPでの展示を皮切りに、全国での活動を展開するようになる。こうした活動から生まれた刺激は、市民自身にも変化をもたらした。市民はTAPでの継続した活動の中からアートプロジェクト運営のノウハウを身に付け、2002年には自主企画として「舟プロジェクト」を開催するまでになる。

「舟プロジェクト」はTAP2002「Take Me to The River 川を知る 川に学ぶ」の一企画として、取手市にある文化が利根川と深い関わりにあることを背景に提案されたものである。取手市はかつて利根川の寄港地として栄えた歴史があり、古くから川とまちの文化は密接な関係にあった。特に雨期には洪水の被害に悩まされ、多くの民家では高瀬舟という浅瀬用の舟で、その被害を凌ぐなど、舟が日用品として馴染み深いものとなっていた。しかし、時代が進み今では、河川敷にスーパー堤防が整備されたことで、洪水の被害はなくなり、舟を使用しなくてもよくなったため、高瀬舟の存在を知る市民は少なくなってしまう。

そこで、「舟プロジェクト」では、もう一度、舟や川とともにあったまちの記憶を蘇らせることを試み、市内の民家の納屋に眠る高瀬舟を集め、利根川付近にある古利根沼に舟を何艘も浮かべ、その上に板を渡して作る舟橋をかけた。また、高瀬舟自体を一艘復刻さ



舟プロジェクト

せるというおおがかりな企画も行った。この「舟プロジェクト」は、三週間にわたり一般公開され、延べ3,000人以上も

の観衆を集め、成功を取めることができた。高瀬舟が古利根沼に浮かんだ日数はわずかではあったが、その景色は、市民にとって深く記憶に残るものになったと言える。

#### 4. 芸術による環境整備事業

「舟プロジェクト」の他にもTAPはさまざまな活動を市民と共に展開することで、芸術による都市環境整備を行っ



壁画プロジェクト

ている。2003年には「壁画プロジェクト」が行われ、東京芸大大学院壁画研究室の指導のもと、芸大生や高校生なども加わり、壁画の制作に取りかかった。制作現場となったのは、JR高架下の壁で、壁画が描かれる以前は薄暗く、ピンクチラシや落書きが絶えない場所であった。しかし、市民らの協力のもとに壁画が描かれてからというもの、悪戯なども一切なくなり、それまでのイメージとは一転した明るい雰囲気を持つ場所に変化していった。この成果に対して取手市も高い評価を示し、現在では壁画を照らすライトが市の予算により設置され夜間の治安維持にも役立てられている。

また、2005年においては、取手市のほぼ中央に位置する、東日本ガス社のガスタンクの表面に新たなデザインを提案することによって、ガスタンクが持つ、危険物としてのイメージを緩和させ、まちのモニュメントとすることを試みた。

このように都市環境の整備は、取手



ガスタンク

市を「芸術のまち」とすることに大きく貢献している。

#### 5. 人材育成事業「TAP塾」

TAPの活動は市内にゆるやかな定着を見せている。しかし、取手市が目指す「芸術のまち」とは、単にイベントの景観を整えることだけでなく、むしろ、取手市より新しい文化が発信されていくことを理想としている。

そこで、TAPでは、地域やアートの将来を担う人材の育成を視野に入れ、2004年よりインターン制度である「TAP塾」を開設した。アートプロジェクトの実務経験を通して、アートマネージャーや、地域の文化リーダーの育成を行うものである。

この「TAP塾」に対する反響は我々の推測を大きく超え、昨年度は30名を超える参加希望者が集まった。多くの参加者を獲得できた要因としては、アートに興味があり、将来アートマネージャーを志す20代の若者やまちづくりや文化活動に関心のある中高年層などから、幅広い関心を集められたことにあった。また、参加者の中には、遠方から取手へ通う者もあり、それまでTAPを支えてきた市民にも大きな刺激を与えている。

こうした人材を育成することは、取手市の環境を基底的に整備することであり、また将来、塾生として参加した者たちが、市内はもとより全国各地で広く文化発展に貢献できれば、それこそがTAPの残した、最も大きな成果となるだろう。

#### 6. 今後の課題と展望

アートプロジェクトを介して多様な価値観の違った人々が集い、交流を持つ事から生まれる新しい視点は、まちの発展にとっても重要な要素となる。また、市民の街に対する愛着や、関心が形となり残される作品は、単なる装飾の域を超え、街のシンボルとして機能することができる。

このような活動に関わり、感じたことは、単にその必要性だけを考慮され作られた物よりも、そこにある必然性を市民が認知した物の方が、街の中で遙かに意味を持ち得るということであった。

現在、取手市においても、中心市街地の整備により文化施設の建設が検討されている。しかし、何を作り、まちに何を残すか、或いはそれによって何

がまちに残っていくのかは、今後、行政と市民がともに考えなくてはならない課題である。

昨年開催されたTAP2005「はらっば 経由で、逢いましょう。」では、取手市の中心市街地整備事業の拠点である、旧茨城県学生寮前のグランド部分を「はらっば」として市民に開放する企画を行った。普段は立入禁止の場所へ足を運



旧茨城県学生寮前

んだ多くの市民は移り変わる街の景色を目の前に、さまざまな思いを巡らせていたことだろう。

そして2006年度のTAP「一人前のいたずら一仕掛けられた取手」では、取手市西方の戸頭地区にある、現在では使われなくなってしまった污水处理施設「終末処理場」を拠点にプロジェクトを展開する。この「終末処理場」のよう



終末処理場

に取手市内に眠っている遊休施設を使うことによって、文化・芸術活動が眠っている場所に植え付ける新たな価値観を呈示することを目的としている。

2008年には毎年各都道府県が持ち回りで開催している「国民文化祭」が茨城県で開催される。それに向けて今年9月には取手市でも準備委員会が立ち上がった。取手市が行うプログラムの中には「現代美術による全国的な公募展」というのが企画されており、TAPに対する取手市からの期待は高まっている。2008年度に照準を合わせ、来年2007年度の企画についても既に動き始めている。